



# 雪中群鳥凶

〈続鴉戯談〉

円地文子

雪中群鳥図〈続鴉戯談〉

定価一五〇〇円

昭和六十二年二月十五月初版印刷  
昭和六十二年二月二十五日初版発行

著者 円地文子

発行者 嶋中鵬二

印刷所 精興社

発行所 中央公論社

〒104東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三四

©一九八七 検印廃止

ISBN4-12-001553-X

雪中群鳥図〈続鴉戯談〉□目次

続鴉戯談

雪中群烏図

七

新孝経

三

行き倒れ

四

鴉が笑うとき

六

しぐれ鴉

八

鴉心中

一〇

帰ってきた鴉

二五

小品・随筆

上田秋成の墓

三六

散り花

三七

秋の笛

三七

文化勲章前後

三八

祖母に聞いた話

三八

指輪

三九

装画・加山又造「凍る日輪」  
（神奈川県立近代美術館所蔵）

続鴉戯談





雪中群鳥図

今年は暖冬とかいわれて、氷雨の降る日さえ少なかったのに、二月になってから急に寒波が襲来して今朝起きてみると思いもかけぬ雪になっていた。

雪は春先のぼたん雪ではなくて、よく積る粉雪のようである。昼までにあがると思ったのに、午後になっても降りつづけている。鴉の勘公は久しぶりにお婆さんの家を訪ねて来た。ペランダの藤棚の上にとまって、翼にくつついた雪を羽ぶるいして落としている。ガラス戸の中をのぞきこむと、お婆さんの姿は寢室にも書斎にも見えない

で、黒っぽいガウンが客間のじゅうたんの上に転がっているのが見えた。よく着物をだらしなく放り出しておくお婆さんではあるが、そのガウンが変に物の上にかぶさっているように膨らんでいるのが、勘公の気になった。

「どうしたんだろ、いそいで脱いででもいったのかな」

そう思ってみたが、何となくそぐわない気持で眼をじっとつけていると、それが単に脱ぎ捨てられたものではなくて、中に何かがうごめいているのが見えた。おやっと思つた途端、勘公は素早くそのガウンの下のお婆さんであることを見破つた。

そう思つて見れば、ガウンの裾の方から白い足の裏がのぞいている。少しずつ動いているのも見取られるのだ。

これは大変だ。たぶんお婆さんはそこでぶっ倒れたのだ。まさか殺されたのであるまいが、ただうずくまったのではなさそうだ。

そう思つた途端、勘公は客間の大きなガラス戸を嘴でとんとんと叩いた。

家には人がないらしく、勿論、誰かの出てくる気配もない。

「大変だ、大変だ、オバアサンがぶっ倒れているよ」

と、勘公は叫んだが、その声は勿論、響きのない雪の音に吞まれてカアカアと聞えただけだった。

それでも翼の羽ばたきとカアカアというくぐもった声が家の内に聞えたらしく、台所の方から見馴れた家政婦の与田の姿が見えた。

「悪い鴉だよ、あいつこの間も肉っ切れを台所からつまみだして、あといっぱい散らかしていった、あれも多分あいつだろう」

勘公は身に憶えのないことを言われてびっくりした。ここ三、四ヶ月、彼はお婆さんを訪問していないのである。というのも、勘公に珍しい恋愛事件があって、その悲恋の末に彼は世にも味気ない心を持ってこの家までやって来たのだった。

それまで彼のいたのは、こんな寒い雪の降る所ではなくて、冬のない南の島であった。勘公は鴉類の中でも女縁のない方で女房や子供は人並みに持っていたが、ほかの女との交渉はこれまで殆んどなかった。それが思いがけないことから、自分の子供の

よくな可愛コちゃんを愛すようになったのである。

その鴉は柄も小さくて、羽根やくちばしも可愛らしかった。おじちゃんおじちゃんと云って慕ってくるので、勘公はとんだお半長右衛門だと思いながら、その子と一緒に飛び廻るのを楽しみにしていた。南の島には勘公の仲間もかなり棲んでいた。そのうちの一羽、小生意気な小僧鴉が勘公の愛する可愛コちゃん鴉に目をつけて、彼女の方も彼を嫌いではないらしい。勘公は大人だからそんな青っぽい連中のイチヤイチヤするのを気にかけてはいなかった。しかし、その小僧鴉の方はいっばし勘公を恋敵と見ていたらしく、或る時、プルメリアの花の咲き乱れている間で突然、勘公を攻撃して来た。こんな小賢しい挑戦などに驚くほど青臭い勘公ではないから彼の突きかけてくる嘴をさっとかわして、逆に頭から胸へかけて鋭い一撃をくらわせた。相手は悲鳴をあげて、見る間に梢の間から木の下の海へ落ちていったが、それを追うように可愛コちゃん鴉がさっと波の上へ飛び下りたのである。二つの若い鴉は危く翼を動かしながら波の上を縫ってゆく。その間にも小僧鴉は勘公に負わされた傷のために堪えかね

て波のなかに沈もうとするのを、女の方が必死にくちばしで支えて浮かせようとする。勘公はその健気さに感動して、小僧鴉はともかく、自分の恋人鴉を救けようと二羽の鴉のもつれているそばまで行ったが、彼女は、凄まじい敵意をこめた目で勘公を見た。そして、自分の男をかばうためだったのであろう、海の上にかぶさっている勘公の大きい翼に下から一撃を加えた。女の一念は怖ろしいもので、勘公の翼の根にも小さい嘴の跡がつき、血が流れた。

勘公は驚いて空に舞い上ったが、二度目に花咲いている木の梢から下を見下ろしたときには、もう二羽の相愛の鴉の姿は見えなかった。薄紅の花の間に黒い翼を休めて、彼は大空にかおーと啼いた。

結局勘公は恋敵をも、愛する可愛コちゃんをも救いえないで、むなしく南の島から北へ北へと飛び帰ってきた。さすがに翼は休めなかったが、彼の赤味を帯びた眼からは時々ポロポロ涙がこぼれていた。あの恋人を救うために、強い勘公の翼の根にいじ

らしい一撃を加えた女心が今の人間の世には珍しく、翼の根に負った傷跡が痛く身にしみるのである。日本の本土に入って、ところどころに雪の飛び交うのを見るようになって、傷心の思いは一向薄らがなかった。自分の仲間の鴉たちが飛んでいるのを見ても、いつもと違う生き物の感じがするのである。雪中群鳥図という画材は多くの日本画家によって描かれているが、そのどの図を見たときよりも、今は群鳥のひとつひとつが、あの可愛コちゃん鴉の挑戦のように見えて、白と黒のくっきりした対照がいたずらに彼の悲しみを掻き立てるのである。お婆さんの家のベランダに翼をすぼめた時、何日ぶりかで勘公は悲しみの鎮まるのを憶えた。実を言うとこの数年来、人間との付き合いで勘公の恋人だったのはこの家のお婆さんだったのである。随分、からかったりませっかえしたり毒口を叩き合ってきたが、それだけに嘘八百のなかに、存外本心を隠していたような気がする。お婆さんまだ死んじゃあ困るよ。オイラがさびしいから。勘公は心の中で幾度かそういう叫びをあげていた。

自然、お婆さんがぶっ倒れているのを見た勘公の驚きも一方ひとかたのものではなかった。

勘公はガラスを嘴で叩きながら、心底からお婆さん死んでくれるなよと叫んでいた。

家の中にも人のざわめく気配がして、やがてさっきの家政婦と一緒に柄の大きな女の子が入ってきた。家政婦は中年太りのした女であるが、女の子の方は横も縦も大きくて悠然としている。彼女は、紺のスラックスに白っぽいトレーナーを着ているが、お婆さんらしい者の転がっているのを見ても、たいしてびっくりする様子もなく、どうしたの、と家政婦に訊いた。

「英子さん、お婆ちゃんまが倒れていなさるんですよ。どうしたもんでしょうね」

彼女は年甲斐もなく、半分怯えたような声を出したが、女の子は驚きも騒ぎもせず、お婆さんの手首をガウンの下からとって見て、

「脈はあるよ」

と言った。

「脈がなかったら、大変じゃありませんか。ベッドまでお連れしますかね」

と言うのに、女の子は平然と答えて、



「また欠糖で眼をまわしたんじゃないの。この人、糖尿病の持病があるから時々こんなふうになるのよ。与田さん、台所にお砂糖があるでしょ。持ってらっしゃいよ」

と命じるように言った。まだ十代の小娘にしては、落ち着きすぎている。この子は大きくなったら女医さんにしたらいいかもしれない、と勘公は思った。

「でも英子さん、脳貧血とかその反対のことだってありますよ」

と与田が言ったが、その時うずくまっていたお婆さんが、変な声で、

「お砂糖、お砂糖」

と言った。

「そら、ああ言ってるじゃないの。台所に粉のお砂糖があるでしょう。それ持ってきて」

「はこ」

と言ったまま、家政婦は立っていったが、やがて紅茶用の棒状の粉砂糖を持ってきた。